鈴鹿市埋蔵文化財調査報告 11

三　重　県　鈴　鹿　市

南　谷　遺　跡

－中部電力株式会社鉄塔建設事業に伴う発掘調査－

1992

鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市遺跡調査会

例　言

1. 本書は中部電力鈴鹿河芸線新鈴鹿変π引込NO.31鉄塔建設事業に伴い発掘調査を行った南谷遺跡（三重県鈴鹿市稲生町字稲生山）の報告書である。
2, 発掘調査は鈴鹿市教育委員会内に設けた鈴鹿市遺跡調査会（代表 市川年夫）が主体となり実施した。
3. 現地調査及び本書の編集執筆は新田剛（鈴鹿市教育委員会文化課文化財係）が担当し、新田智子氏の協力を得た。
4. 遺物整理は浅野和歌子・石谷佳誉子・加城陽子・杉本恭子（同臨時職員）が行った。
5. 作業員の派遣は鈴鹿市シルバー人材センターに依頼した。
6. 遺物実測図の縮尺は3分の1である。
7. 本書で用いた方位は真北を指す。
8. 出土遺物及び図面等は鈴鹿市教育委員会で保管している。
9. 調査及び本書の執筆に際し下記の各位ならびに諸機関からご指導ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。（敬称略・50音順）

伊藤洋・大場範久・岡田登・小玉道明・鈴木克彦・仲見秀雄・八賀晋・村山邦彦・吉田義隆・鈴鹿市文化財調査会・中部電力株式会社・三重県教育委員会文化部文化振興課・三重県埋蔵文化財センター

目　　次

1. 前言…… 1
2. 位置と周辺の遺跡…… 1
3. A地区の遺構と遺物…… 3
（1）遺構…… 3
（2）遺物…… 3
4. B地区の遺構と遺物…… 8
（1）遺構…… 8
（2）遺物…… 9
5. まとめ…… 9
6.〔付篇〕資料紹介　鈴鹿市稲生町野田遺跡採集の弥生土器…… 10

挿図目次

第1図　周辺の主な遺跡（1/50,000）…… 2
第2図　地形図（1/5,000）…… 4
第3図　発掘区配置図（1/800）…… 5
第4図　調査後測量図（上：A地区，下：B地区）（1/200）…… 5
第5図　竪穴住居SB1実測図（1/50）…… 6
第6図　SX1・2他実測図(1/100) …… 7
第7図　遺物実測図（1～4：SB1,5～7：SX1,8～12：野田遺跡採集）（1/3）… 8

写真目次

写真1　A地区全景／B地区全景
写真2　SB1／SX1遺物出土状況／作業状況
写真3　SBl・SX1出土遺物
写真4　野田遺跡採集遺物

表 目 次

第1表　遺物観察表 …… 11

１．前　　言

平成元年9月1日中部電力株式会社から鈴鹿市教育委員会に対して鈴鹿市稲生町字稲生山の鈴鹿河芸線新鈴鹿変π引込NO.31鉄塔建設事業に伴う埋蔵文化財分布調査の依頼があった。該当地の現況が山林であるため踏査は困難であり、また南谷遺跡として周知の遺跡に登録されていることから試掘調査の必要がある旨報告した。

鈴鹿市教育委員会では平成３年３月19日に試掘調査の依頼を受け、同28日に試掘調査を実施した。事業地内に１．５m×２mの試掘塘を１０カ所、１．５m×６mの試掘壙を２カ所設け調査を実施したところ6カ所から遺構ないし遺物が検出されたため全域遺跡として保護措置がとられるよう要請したが設計変更は難しく、鉄塔及び工事用進入路の掘削部分については記録保存を図ることとした。鉄塔部分をＡ地区、工事用進入路をＢ地区とし、鈴鹿市教育委貝会内に設置した鈴鹿市遺跡調査会（代表：市川年夫）と中部電力株式会社（取締役津支店長：木村洋一）との間で委託契約を締結し、平成３年４月８日から 同30日まで発掘調査を行った。

２．位置と周辺の遺跡

南谷遺跡(21)は第三紀層からなる丘陵の縁辺に位置する。東には稲生の集落を乗せる低位段丘が分布し、南から南東にかけては中ノ川に沿って沖積平野が広がる。鈴鹿市内には数多くの遺跡が残されているが稲生地区もその集中地区の一つとして知られている（第１図）。

稲生地区で最も古い遺物はナイフ形石器文化段階のものである。今までにナイフ形石器などが採集された遺跡には山脇遺跡(1)、大新田遺跡(2)、池ノ下遺跡(3)、祓山遺跡(4)、 北野遺跡(5)、今村Ａ遺跡(6)があり(1)、鈴鹿川左岸と並んで概期遺跡が密集している。

縄紋時代の遺物は西山遺跡(7)や今村A遺跡などで採集され(2)中ノ川を挟んで南の郡山遺跡群(8)には追谷遺跡、西川遺跡がある(3)。中ノ川流域において縄紋時代以前の遺跡の発掘調査例は西川遺跡のみであり、集落構造など詳細について考察できる材料は極めて少ない。

弥生時代では、高井Ｂ遺跡(9)、畑遺跡(10)、染野遺跡(11)などがある。高井Ｂ遺跡では中～後期の遺構と遺物が(4)、畑遺跡では後期の遺構と遺物が検出されている(5)。方形周溝墓は松山遺跡(12)(6)で1基、塚腰遺跡(13)(7)で2基検出されているがいずれも古墳時代に下る可能性がある。野田遺跡(20)では資料紹介のとおり中期後葉の遺物が採集されている。

古墳時代では、伊奈冨遺跡(14)(8)と稲生東遺跡(15)(9)にて調査が行われ後期の竪穴住居が検出されている。ただし、古墳となると稲生地区ではあまり多くしられていない。北山1号墳(16)は発掘調査されているが小量の埴輪が出土したのみで主体部はおろか墳形も

明らかになっていない(10)。稲生北山古墳群はもとは6基あったといわれ、多くの消滅墳の存在が考えられる。

一方、中ノ川右岸の郡山遺跡群では三角縁神獣鏡が出土した赤郷1号墳、漢式鏡や黒斑を有する埴輪が出土した西高山1号墳(11)、鉄刀などの豊富な副葬品が出土した経塚古墳(12)や大野古墳群・茶臼山古墳群などの群集墳がある。

古窯址としては稲生1～4号窯が知られているが大部分が消滅している。これらのうち1・2号窯(17)は発掘調査が行われ5世紀末から7世紀までの遺物が出土している(13)。

律令期以降の遺跡としては西高山A・B遺跡、末野A・B・C遺跡などの郡山遺跡群があり、中世では高井B遺跡や塚腰遺跡(14)で発掘調査が行われている。

第1図　周辺の主な遺跡　(1/50,000)

1. 山脇遺跡 2. 大新田遺跡 3. 池ノ下遺跡 4. 祇山遺跡 5. 北野遺跡 6. 今村A遺跡 7. 西山遺跡 8. 郡山遺跡群 9. 高井B遺跡 10. 畑遺跡 11. 染野遺跡 12. 松山遺跡 13. 塚腰道跡 14. 伊奈冨道跡 15. 稲生東遺跡 16. 北山古墳群 17. 稲生1・2号窯 18. 伊奈冨神社遺跡 19. 稲生城跡 20. 野田遺跡 21. 南谷遺跡

［註及び参考文献］
(1)中森成行編(1987)『鈴鹿市遺跡地図』
(2)前掲(1)に同じ
(3)中森成行(1983)「西川遺跡の調査」『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』P.33～55
(4)1990年鈴鹿市遺跡調査会発掘調査　未報告
(5)仲見秀雄(1966)「畑遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』P.67～97
(6)1979年鈴鹿市遺跡調査会発掘調査　未報告
(7)1980年鈴鹿市遺跡調査会発掘調査　未報告
(8)小玉道明(1966)「伊奈冨遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』P.26～65
(9)伊藤克幸(1975)『稲生東遺跡』
(10)仲見秀雄(1966)「北山第1号古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』P.21～27
(11)中森成行(1983)「西高山古墳群の調査」『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』P.1･5～32
(12)真田幸成(1966)「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』P.99～159
(13)大場範久(1980)「古墳時代」『鈴鹿市史』第1巻P.260～261
(14) 1991年鈴鹿市教育委員会発掘調査　未報告

３．Ａ地区の遺構と遺物

Ａ地区は丘陵の頂上部に位置し、標高約36mで、低地との比高差は約30mである。調査面積は148㎡である。

(1) 遺　構（第５図）

遺構検出面は表土を0.1～0.2m除去した黄褐色ないし青灰色シルト層（地山）上面である。植林による遺構の破壊が著しい。検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居SB1のみである。

竪穴住居ＳＢ１　発掘区の南西隅で検出された。埋土は淡褐色シルトである。2～3回建て替えが行われているようだが、時期を隔てたものとの重複の可能性も完全には否定できない。隅丸方形と方形の平面形が観察でき、遺構の残存状況より前者から後者への変遷が窺える。隅丸方形住居は南北6.5m、方形住居は南北5.0mを測り、検出面から床面までの深さは0.05～0.10mである。保存状態が悪いためか炉跡は確認できなかった。新旧いずれも4本の主柱穴をもつと考えられ、それぞれ2カ所が検出された。隅丸方形住居の柱間は南北3.4mで、床面からの深さは0.32～0.42mを測り、方形住居の柱間は南北5.0mで、床面からの深さは0.44～0.47mを測る。未検出部があるため長辺軸は確定できないが、検出された主柱穴の示す辺の方向は前者がN18°W、後者がN21°Wである。壷・高坏（第7図1～4）が出土した。

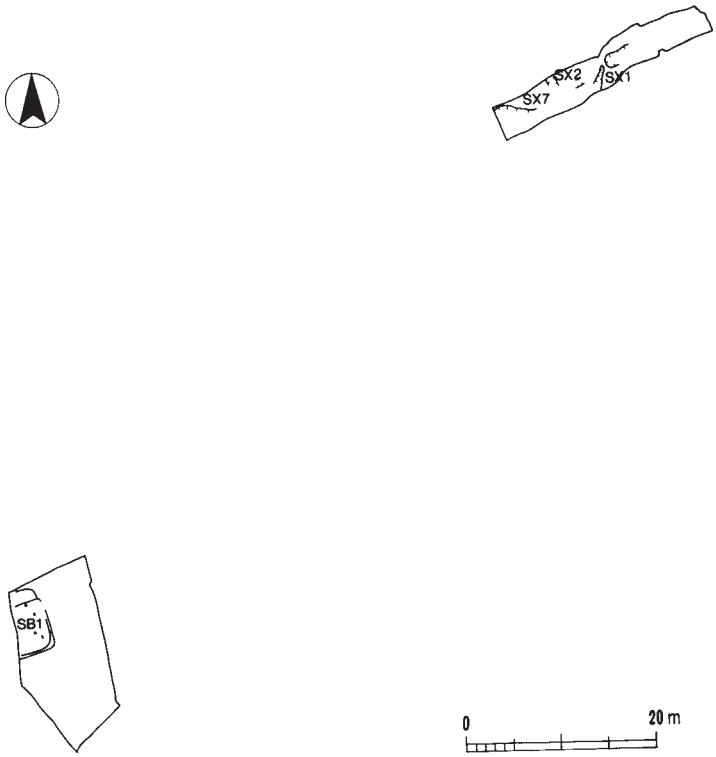
(2) 遺　物

竪穴住居SB1から出土した弥生時代後期の土器のみである。遺物の残りはきわめて悪く、かろうじて底部片4点と高坪1点を図示し得た。

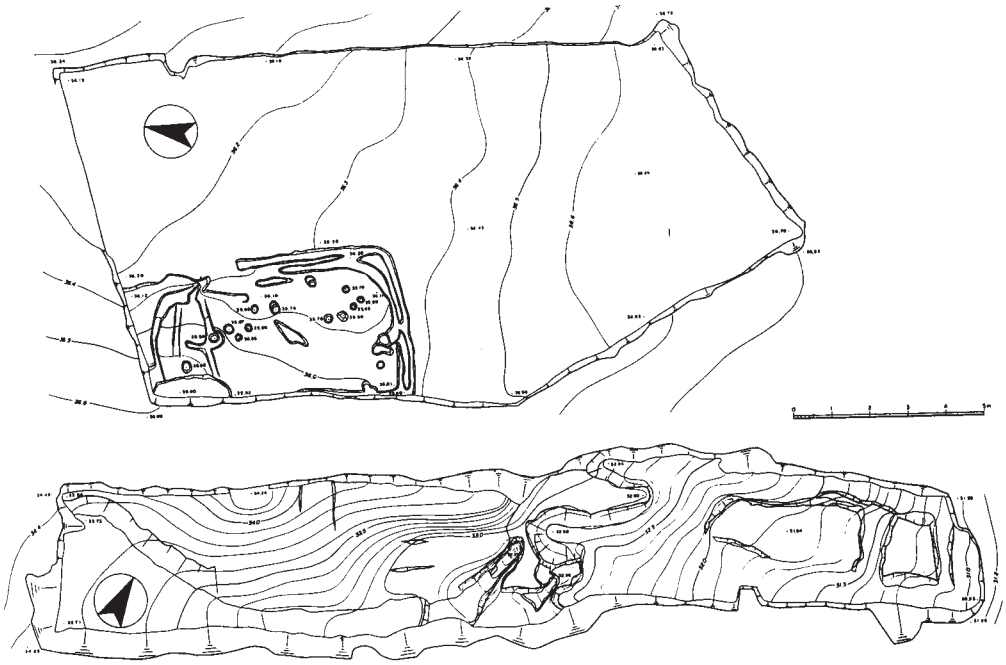
底部片（第7図1～3）　1・2は壷形土器、3は台付壷形土器と考えられる。1の底部は中央が窪んでおり、したがって上げ底となっている。

高杯形土器（第7図4）　脚部中程のみ残存する。円柱状の中実脚部に棒状工具にて穿孔し、不完全な中空脚部となっている。外面には直線紋らしき沈線が2条観察できるが、風化が著しいため判然としない。

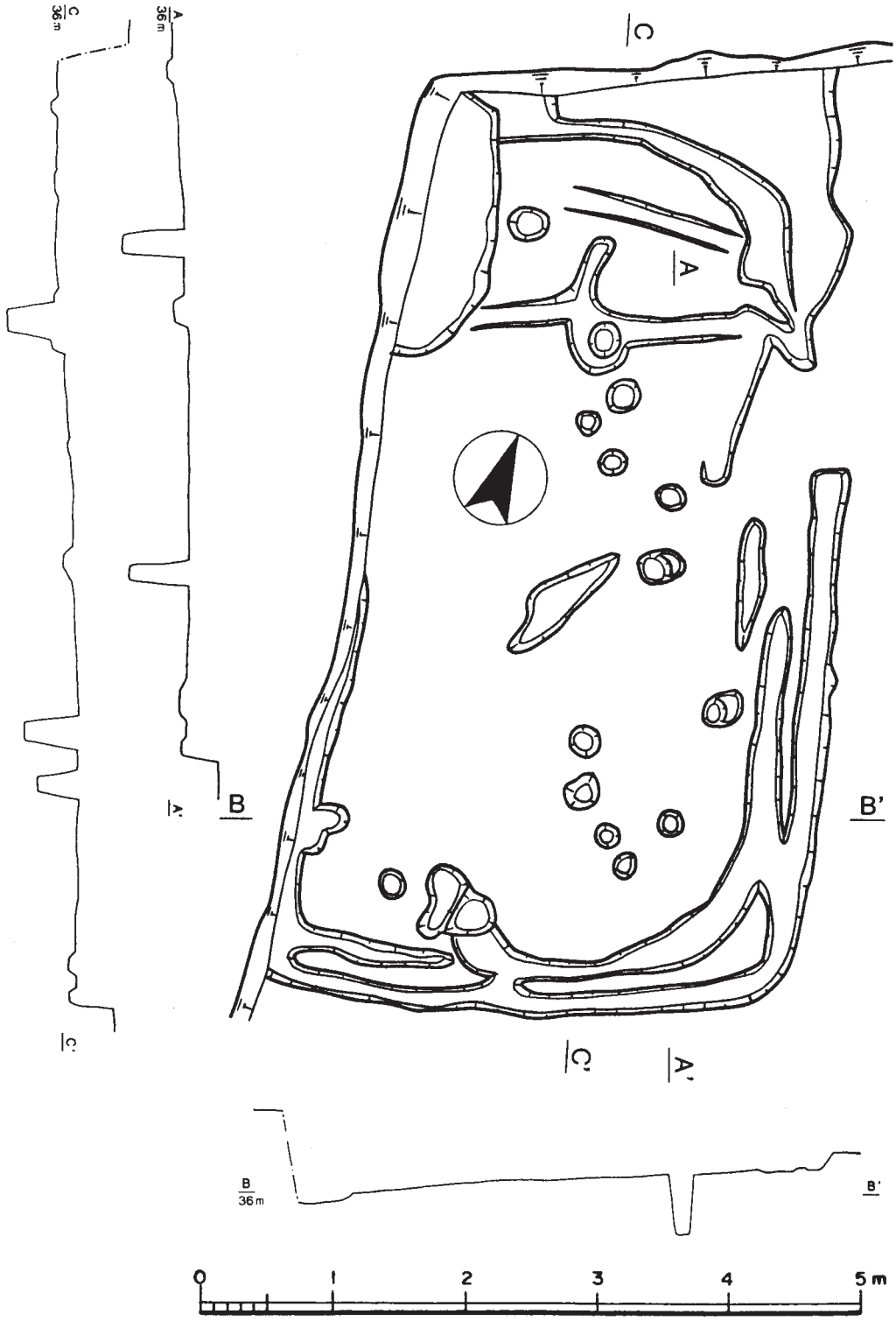
第２図　地形図(1/5,000)



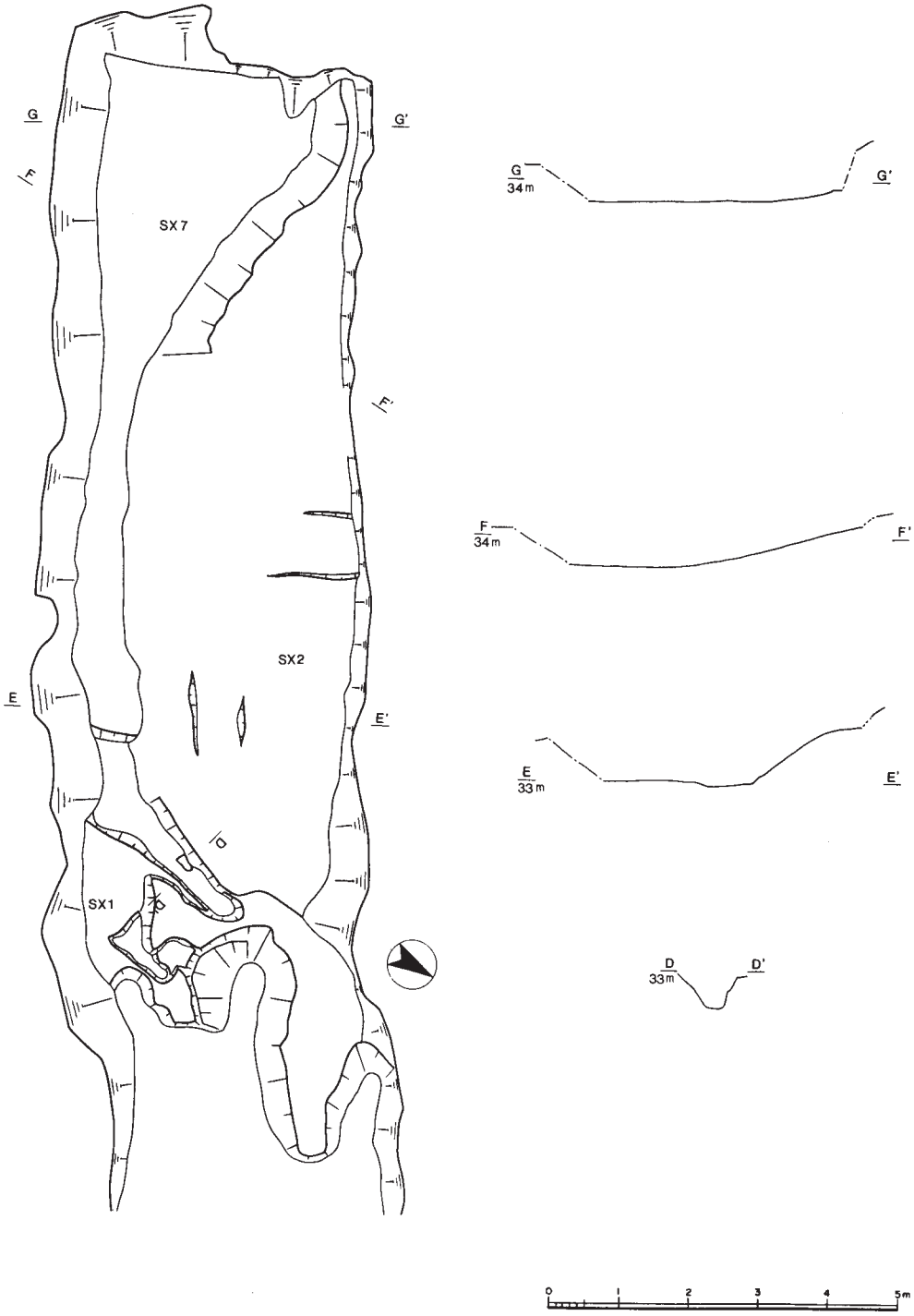
第３図　発掘区配置図(1/800)



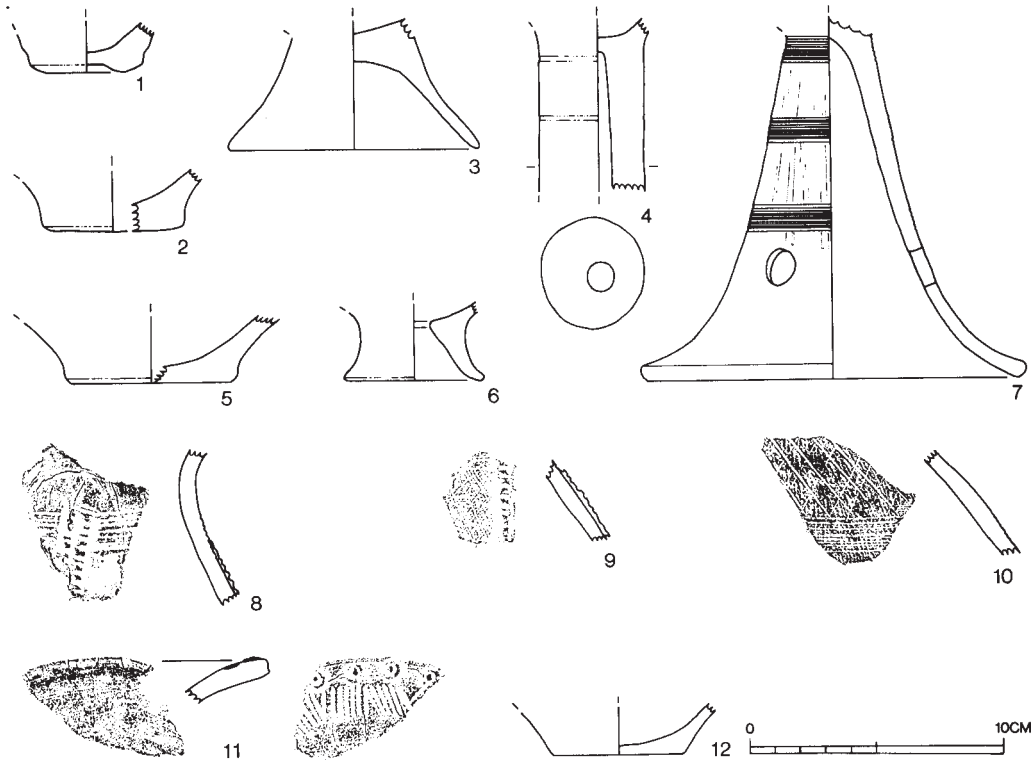
第４図　調査後測量図（上：Ａ地区、下：Ｂ地区)(1/200)



第５図　竪穴住居ＳＢ１実測図(1/50)



第６図　ＳＸ１・２他実測図(1/100)



第７図　遺物実測図(1～4:SB1、5～7:SX1、8～12野田遺跡採集)(1/3)

４．Ｂ地区の遺構と遺物

Ａ地区の北東63m標高32～34mの斜面に位置し、調査面積は114㎡である。

(1) 遺　構（第６図）

弥生時代後期の土器を伴うSX1・2が検出された。発掘区が狭溢であり、かつ、残りが悪いためこれらの遺構の性格については確定できないが、遺構の形状から消極的にではあるが方形周溝墓の一部であると推定できる。これらの北東で検出された同時期の溝状の落ち込みも同種のものかもしれない。その他、調査区南西に近接する墳丘状の高まりに付随するように円弧を描く周溝様の落ち込みSX7が検出された。ただし、いずれもきわめて残りが悪い。遺構検出面は表土を0.05～0.20m除去した黄褐色ないし青灰色シルト・砂質シルト層（地山）上面で、遺構埋土は淡褐色シルトである。

ＳＸ１　発掘区の中央部で西辺溝と北辺溝の一部が検出された。西辺溝は幅約0.8m、深さ0.4～0.7m、北辺溝は幅約1.3m、深さ約0.22mである。西辺溝からは高坏（第７図7）が、北辺溝からは壷と台付甕の底部（第７図5・6）が出土した。

ＳＸ２　SX1の西に近接して南東辺溝と南西辺溝の一部が検出された。遺構の残りは非常に悪く検出面から底面までの深さは0.01～0.10mである。南東辺溝は幅1.5m、南西辺 溝は幅1.9mである。南東溝から弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

ＳＸ７　発掘区の南西部で検出された。円弧を描く溝ないしは削り出し状の遺構と考えられる。西隅で立ち上がっている。遺物はまったく出土していない。

(2) 遺　物

SX1西辺溝・北辺溝や調査区北東部分の落ち込みから弥生時代後期の遺物が出土した。

底部片（第７図５・６）　５は壷形土器、６は台付壷形土器と考えられ、ともにSX1北辺溝から出土した。６には底部に焼成後の穿孔がある。

高坏形土器（第７図７）　SX1西辺溝から出土した脚部のみの資料である。３方に円孔を有し、脚部は外反する。外面は縦にヘラ磨きされ、３帯の櫛描直線紋が施されている。

５．まとめ

Ａ・Ｂ地区併せて262㎡という小面積の調査であったが、竪穴住居１棟と方形周溝墓と考えられる遺構が２基検出された。出土遺物はきわめて少なく、しかも、残りが悪いため編年的な位置付けには困難が伴う。

SX1出土の高坏(第７図７）は上箕田(5)(1)や南山遺跡SX1(2)、草山遺跡SX179・SB18下層(3)などの段階に特徴的なもので、尾張では山中期(4)や後期２(5)にあたる。SX2出土の土器はすべて細片で図示できるものは皆無であるがSX1とほぼ同じ段階のものと判断した。それではＡ地区の竪穴住居SB1出土の土器はどうであろうか。高坏(第７図４）は中実の円柱状脚部に棒状工具によって穿孔し、不完全な中空脚部を作出したものである。中実の脚部は弥生中期以前の高坏にみられる要素といえる。脚部が円柱状となる高坏は後期1の段階にも見られる(6)。SB1自体複数時期にまたがる可能性もあるが、その一端は同じ後期でもSX1よりやや古い段階と考えておきたい。したがって、Ａ地区は弥生時代後期前半の居住域であり、Ａ地区の北東斜面にあたるＢ地区は同時期の墓域であると考えることが可能である。

さて、付近で弥生後期の居住域・墓域を検討できる良好な資料は少ない。後期の竪穴住居は鈴鹿市国分町沖ノ坂遺跡で後期前半のものが、同市東玉垣町深田遺跡で後期後半のものが検出されているのみである。一方四日市市域では伊坂町西ケ広遺跡、大矢知町山奥遺跡、生桑町字大谷遺跡、尾平町上畑遺跡、尾平町永井遺跡、東日野町東日野遺跡、河原田町狐穴遺跡など多くの遺跡で検出されている。これらの住居の規模及び平面形をみると1辺6m前後の正方形が最も多く、まれに８～10mの大型のものがある。南谷遺跡例は規模からいえば前者に属するであろう。竪穴住居が検出された丘陵は平坦地が少なく、未調査部分の存在を考慮しても比較的小規模な集落の一部であると判断される。詳細な考察については今後の調査の進展を待ちたい。

［註及び参考文献］
(1)大場範久・真田幸成・仲見秀雄 1970『上箕田弥生遺跡第二次調査報告』P.40 ～ 43
(2)新田剛 1991『南山遺跡・南山６号墳』P.9 ～ 14
(3)松阪市教育委員会 1982『草山遺跡発掘調査月報ＶＩ』P.6
(4)大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLV(3)P.66 ～ 74
(5)石黒立人 1987「高蔵式から山中式へ（予察）－「仮称見晴台式」をめぐって－」『第３回東海埋蔵文化財研究会　欠山式土器とその前後　研究報告編』P.39 ～ 50
(6)前掲(5)

６．資料紹介　鈴鹿市稲生町野田遺跡採集の弥生土器

以下に紹介する資料は1989年鈴鹿市稲生町野田遺跡で採集された弥生土器である。採集地点は同町所在の稲生馬池西130㎜の土取り現場である。採集地点は『鈴鹿市遺跡地図』（鈴鹿市教育委員会 1987）に破線にて示される野田遺跡 20㎜ × 20㎜ の範囲から外れるが、当遺跡に含めておきたい。なお、その後も現地の踏査等が随時実施されてはいるが新資料の採集はない。

採集された土器は壷の頸部１点、胴部２点、口縁部１点、甕の底部１点の計５点である。

壷形土器（第７図８～11）　８～10は同一個体と考えられる。８は頸部、9．10は胴部上半である。棒状貼付紋、斜格子紋、櫛描直線紋等で飾られた受口口縁壷と考えられる。胎土は粗砂を少量含むものの良好で、焼成も良い。

11は口縁部の破片である。口縁部内面にはハケ状原体による連続刺突紋と竹管状原体の刺突が付された貼付紋が施されている。胎土・焼成共に良好である。

甕形土器（第７図12）　甕の底部と考えられる。粗砂・中砂を多く含む。胴部外面は縦にハケ調整がなされている。

以上の土器は弥生中期後葉のものと考えられる。櫛描紋等で過度に装飾された受口壷はいわゆる平野部の土器に対して山麓部に特徴的な土器とされ、近江地方との関連が強いとされるものである(1)。四日市市西松本町平戸山遺跡(2)、鈴鹿市安塚町起Ａ遺跡SB5(3)、同山辺町添遺跡(4)、亀山市太岡寺町大鼻遺跡４号墓(5)、同川崎町地蔵僧遺跡(6)など主に鈴鹿川流域以北に類例が知られる。これらの立地を見ると、大鼻遺跡や地蔵僧遺跡のように鈴鹿山麓に近いもの、起Ａ遺跡のように平野に面するもの、平戸山遺跡・添遺跡などその中間に位置するものがある。当資料の発見によって鈴鹿川流域を離れてさらに南に分布が確認されたことになる。

［註及び参考文献］
(1)鈴木克彦 1990「伊勢地方の土器」『伊勢湾岸の弥生時代注記をめぐる諸問題－土器・墓・ムラに見る画期と地域間交流－』P.187 ～ 193
(2)水野正好 1988「三弥生時代 10 常磐地区１平戸山遺跡」『四日市市史』第２巻資料編考古(2)P.132 ～ 136
(3)山下雅晴 1983「起Ａ遺跡」『昭和５７年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』P.9 ～ 18
(4)農作業中出土。鈴鹿市教育委員会保管
(5)三重県教育委員会『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』
(6)倉田直純 1978『地蔵僧遺跡発掘調査報告』

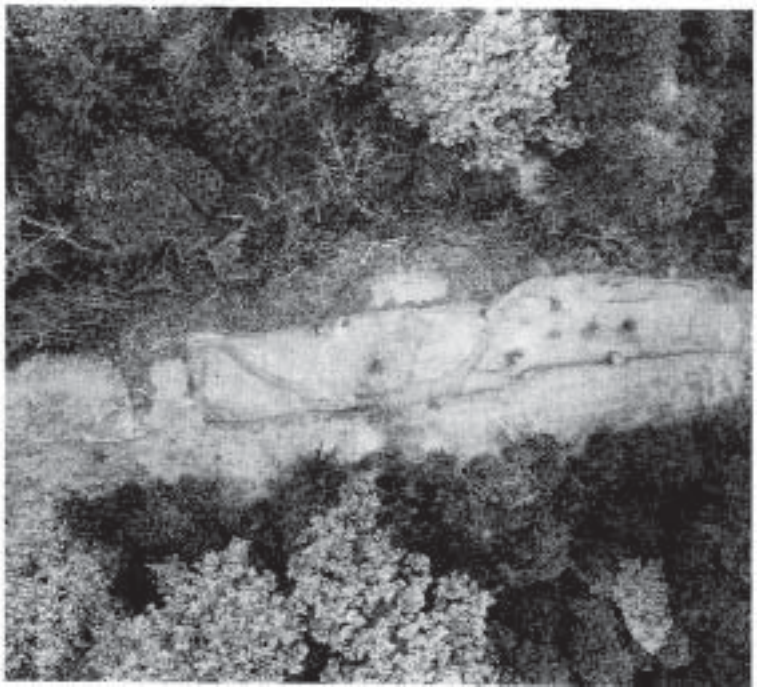
第1表　遺物観察表

（　）は推定法量

No.	器　種	定径cm	器形・その他	胎　　土	焼成	色　調
1	壺	(4.4)	底中央窪む．底のみ1/3残	粗粒砂少し	並	淡黄褐色
2	壺	(5.5)	底のみ1/3残	粗粒砂含む	並	淡赤褐色
3	台付壺	(9.7)	台部のみ1/3残	粗粒砂極粗粒砂含む	並	淡黄褐色
4	高　坏	?	中実気味の脚部脚部中程のみ残	極粗粒砂多く含む	良好	淡黄褐色
5	壺	(6.3)	底のみ1/3残	極粗粒砂細礫含む	並	淡黄褐色
6	台付甕	(5.3)	焼成後穿孔あり台部のみ1/2残	粗粒砂含む	不良	淡黄褐色
7	高　坏	(14.7)	3方円孔．3体クシ直線紋．外面ヘラミガキ.1/3残	粗粒砂少し含む	並	淡黄褐色
8	壺	?	頸部．棒状貼付紋，斜格子紋，クシ直線紋	粗粒少し含む	良好	褐　色
9	壺		体部．8と同一			
10	壺		体部．8と同一			
11	壺	?	口縁部．内面にクシ連続刺突紋，貼付紋．	良好	良好	黄褐色
12	甕	(5.1)	外面タテハケ．底のみ1/3残	粗砂中砂多く含む	良好	褐　色

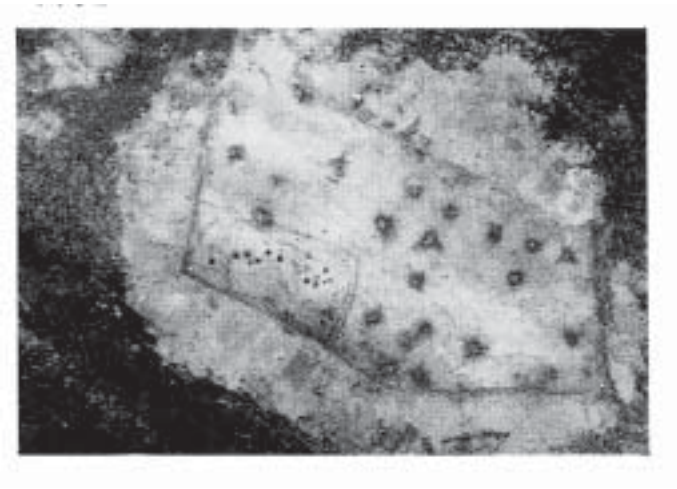
写真１

Ａ地区全景



Ｂ地区全景

写真２

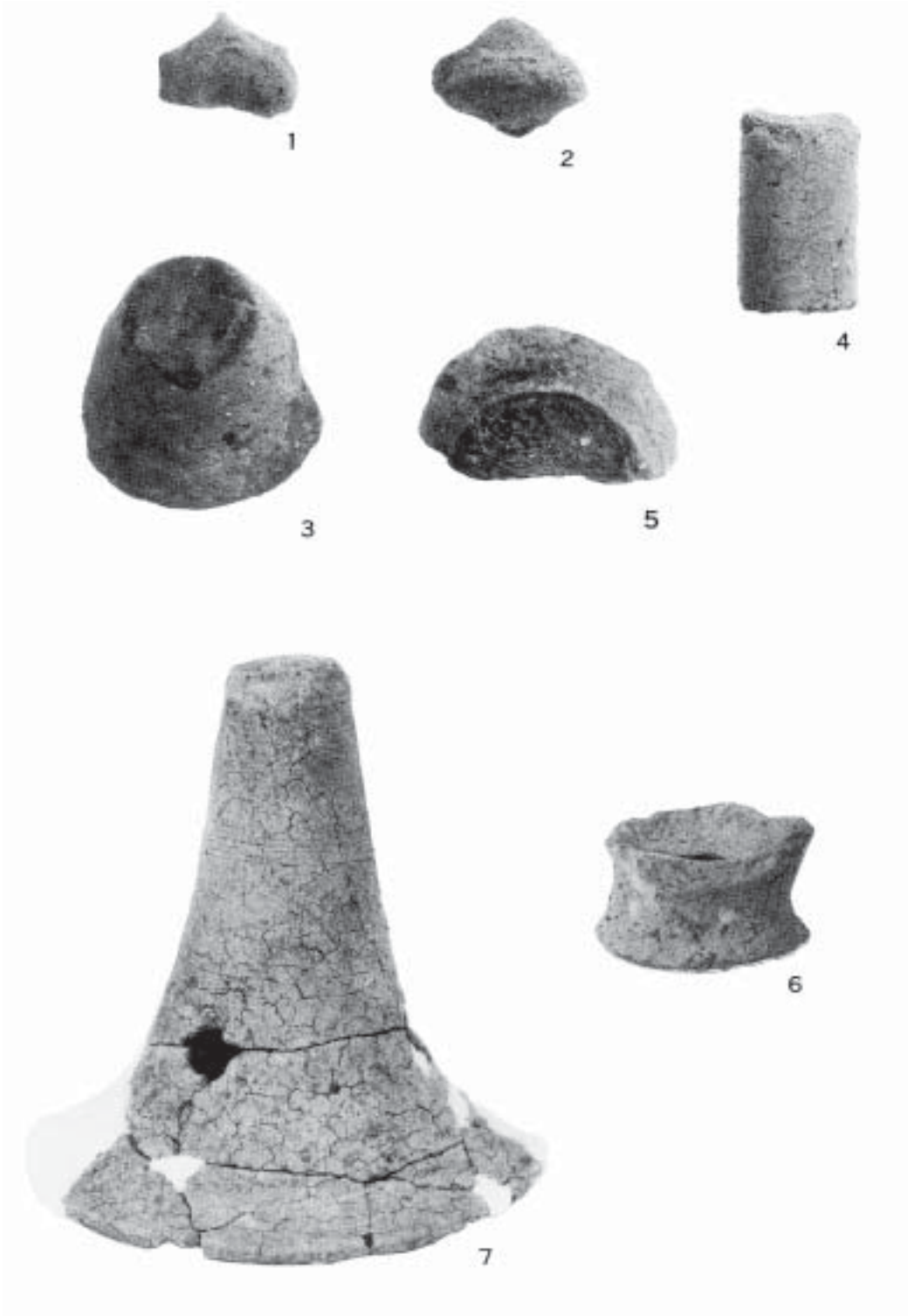


ＳＢ１

ＳＸ１遺物出土状況

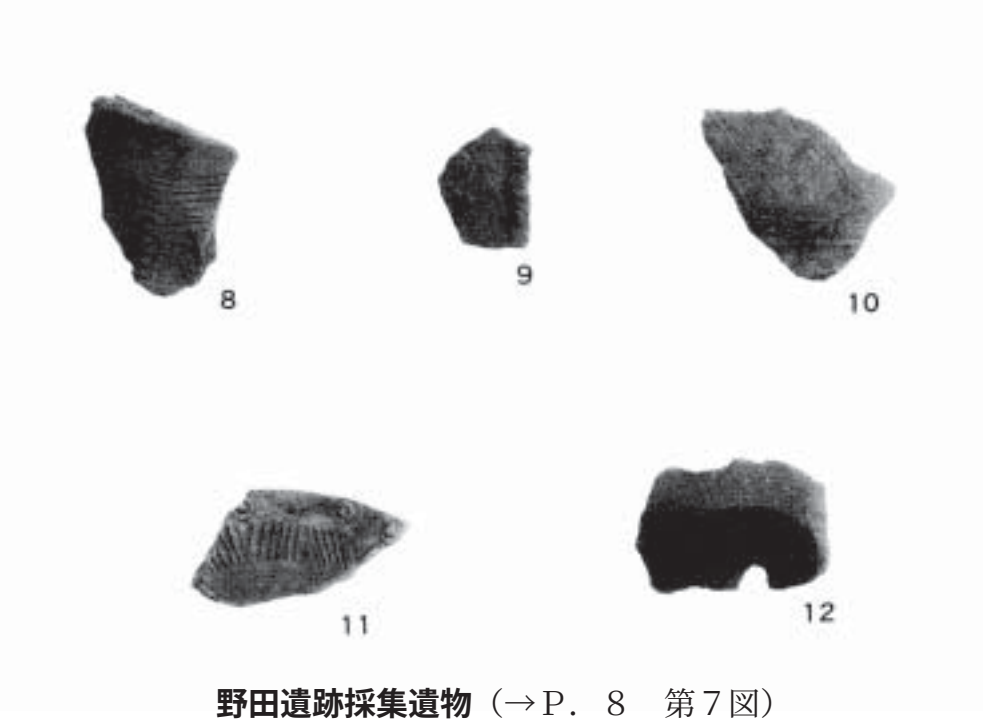
作業状況

写真３



ＳＢ１・ＳＸ１出土遺物(→Ｐ．８　第７図)

写真４



野田遺跡採集遺物（→Ｐ．８　第７図）

鈴鹿市埋蔵文化財調査報告 11
南谷遺跡
－中部電力株式会社鉄塔建設
事業に伴う発掘調査－
1992 年 3 月
編集・発行　鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市遺跡調査会
印　　刷　株式会社星光堂
四日市市三ッ谷町 14-15